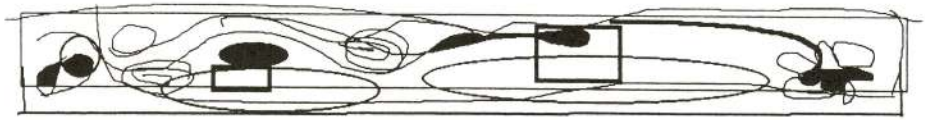
村野次郎創刊

香蘭

2023年（令和５年）３月号

第 100 巻　　第 3 号　　通巻 1107 号

二〇二三年（令和五年）三月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇〇巻第三号



香　　蘭

2023年（令和５年）３月号
第100巻　第３号　通巻1107号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（91）……吉澤容子…表二
作　品
一……2
二……20
三……29
推薦香蘭集……36
香　蘭　集……37
一頁公論（22）戦没学徒のうた……和田羊子……13
作品一特選（一月号）……石井・伊藤（美）・岩田・江口・大井田・谷本・西野・松田・宮原……14
作品二、三特選（一月号）……丑山・小笹・庄司・中井・平川・藤本・松沢・安田・河野・澤田・田村・藤田……16
村野次郎への旅（155）……千々和久幸……18
七　首　抄（一月号）……本田・後藤・三神・古澤……41
私の読む現代短歌（18）「幸福な因縁」を得た石川不二子……田中あさひ……42
エッセイ・自由研究　食と健康の科学……小城勝相……44
耳言あれこれ（16）……田中あさひ……47
焦　点（一月号）夢と彩りのある歌……千々和久幸……48
作　品　評（一月号）　作品一……桜井京子……50
作品二……青山侑市……52
作品三……沙阿羅……54
香蘭集……篠永路子……56
緑　地　帯……宮口・菊地（篤）・坪井……58
受贈歌集・歌書……61
明宝研究会第一三五回　十二月例会　二歌集を読む……石井雅子……62
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……68
創刊一〇〇周年記念特集号　原稿募集……82
歌会及び会合・会員消息・他……84
編集後記・新宿日記……88・表三
表紙絵……中村陽子「春ひかる」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（91）

上簇を遂げし如くに透明に
しづかに老いし友を尊む

『村野次郎歌集』

吉澤容子

父の生家は養蚕農家で、祖母は立ち機織も良く為し、初孫で一人っ子の私は小さい時より、「お蚕様」に興味があった。

毛蚕の掃き立てから繭になるまでの作業は別棟の三階建の蚕室で行われた。

石蔵に保冷された桑の葉を蚕の成長に沿って刻み、最後は枝ごと与えられるまで、つぶさに眺めて来た。

その旺盛な食欲がぴたりと止んだ時、首をもたげてのその透き通った体を忘れる事は出来ない。簇に移す仕事を手伝う度に、不思議な感動を受けた。

この歌に出会った時、目頭が熱くなり、白い繭に眠るお蚕様は最も美しい人間の一生に似ていると、今でも思っている。

（短歌研究文庫『村野次郎歌集』15頁、『村野次郎三百首』103頁に掲載）

四選者の作品

銀杏落葉

平塚　千々和　久幸

街路樹の「銀杏落葉」がひと晩のうちにことごとく葉を散らしたり
ひょいとした弾みでコロナに感染し死んだふりして七日七夜を
引き伸ばすほどの時間のあらざるを嘆かうなかれ背戸の蜻蛉よ
知る人ぞ知る老人の吹き溜まり床屋は朝からビールが飲める
サッカーに負けたくらいで泣くものか領土盗られた訳でもないに
闘って共に闘い抜いた果て妻の死いかに語り継ぐべき
体重を抜かれて宙を行くような日々なり妻は死んでしまえり
天命といえば万事は片のつく天邪鬼晴れて行き所なし

光の洞

我孫子　丸山　三枝子

もうれつな喉の痛みに受診してコロナ陽性告げられている
五回目のワクチン接種六日後に感染したり逆算すれば
コロナゆえ休むと友に告げたれば罹れば無敵と返信の来る
感染にめくるめく身はささいなる光の洞か　極月の月
パルスオキシメーター届き朝夕に酸素飽和度測定せよとぞ
体温と酸素飽和度日ごと告げ守られながら縛られている
裏径を選びて犬と散歩するコロナに罹らぬおまえ先立て
外出禁止解除となりて行く歌会コロナを終に飼い慣らしたり

ぼたん雪

東京　桜井　京子

コロナにて死にたる一人カルロス・マリン聴いてゐるなり秋の終りに
お痒いところありませんか　仰向けの死は朧にて甘やかに来む
もう長く掃除してもらへぬポストなり国道沿ひにずつとひとりで
色ぐろの痩せた子だつたと母言へりあれからわたしに降るぼたん雪
軒したの蟻ぢごくといふを眺めをりこの世の地獄はここにはあらず
タッチするタイミングずれて改札のわたしが私を振り返りたり
夜の更けに鳴いてゐるのは青鷺かあしたのことはあした思はむ
山茶花の白きが咲いて散り敷くをしばし眺めてをりたり今朝は

母の賀状

横浜　渡辺　礼比子

相模湾金色に映え東京湾すでに小暗し尾根道ゆけば
みなさんを濃厚接触者にしましたと詫びメール来る朝一にして
コンビニという語をついに覚え得ず「角の店」と呼び母は通いき
認知症初期なる母は「病む母」を詠めよと言えり苦吟のわれに
わが顔は忘られたれどあなうれし病母が自筆の賀状くれたり
詩才なき者は去れよと言われしか　銀杏落ち葉を避けつつ帰る
時として兆す妬心は丹念に摘まんか友を失わぬため
ゆき過ぎて振り向きにけり柊の花つつましく香りを放つ

作品一特選

（一月号作品から）　　丸山　三枝子　選

踏切り　　習志野　石井　雅子

永遠に生きたいことの裏返し少年自死せり透き通る秋
踏切に通過の電車を見て思ふヘルマン・ヘッセの『車輪の下』を
撮り鉄がときどき現る踏切に置かれた花束この頃は見ず
祖父ちゃんに可愛がられて学成らず秋の彼岸に墓石洗ふ
亡き人を思ふに似たり立ち枯れし定家葛の香を懐かしむ
ヨガの終り「シャバアーサナ」と目を瞑り無我の境地になれないわたし

・四首目、学の不足を祖父の溺愛の所為にして懐かしむ謙虚な作者。

罪にはならず　　川崎　伊藤　美恵子

きみのいた頃の暮らしに少しずつもどりゆくなり冬がはじまる
かろうとの入口ふさぐ石の板のけても法的に罪にはならず
死ぬことを恐がりいたる人なれどはればれと死にきわれを残して
われひとりの為に生きゆく虚しさや薄墨色の夕暮れ来たる
体調を崩して入院する朝死にたるひとの写真を持ちて
朝々に色とりどりに華やかに虹の七色わが飲む薬

・六首目は虹色の美しい薬への皮肉、有り難くもない七錠を今朝も飲む。

終の路　　安来　岩田　明美

穂すすきの靡く駒返り峠行く石倉さんに会ふ終の路
微笑める遺影の前に無沙汰詫ぶ香蘭松江支部細く続けて
思ひ出は全国大会　訛りつつ共に歩みし明治神宮
あいさつは先ず空もやう風もやう御天道様は有り難きかな
暮れ近き秋の板戸を押し開けて夕焼け連れて猫は帰り来
柿の実をついばみて去る鴉二羽夕焼け空が似合ひ過ぎるよ

・前の三首は石倉正枝さんへの挽歌。「訛りつつ」に籠もる悼みと親しみ。

秋の日　　柏江　口絹代

秋桜の花にふりくる秋の雨一粒一粒が誰かのたましい
しずしずとしずのおだまきくり返し若き夫を捜しにゆかん
昨日今日冷たい雨が降りそそぐもう遅すぎることの数々
これまでの私の時間よ放たれて遠野の空にいやされていよ
長命寺は小さき寺なり待たされて購いたるは白き桜餅
雑木林のまだ残りいるこの町の郵便ポストに秋の陽の射す

・さっぱりした詠みぶりの五首目の、一読無意味な内容に心が安らぐ。

肉豆腐　　川崎　大井田　啓子

ひさびさに電話かければ五百キロむかうに友の変はらぬ声あり

部屋干しの洗濯物のむかうには秋明菊のみだれ咲く見ゆ
肉豆腐の匂ひただよふ午後の部屋あの人にまた会ひたいなどと
家家の影を踏みゆくわたくしは影を持たずにしばらく歩む
公園のけやき大樹をよぢのぼる蔦は青葉をそよがせながら
杖をつく夫にしたがひ夕空の茜の色をめざして歩む

・身辺の出来事を詠みながら、身辺から浮上した世界へ連れ出してくれる。

友　　神奈川　谷本朝江

父母の眠るふるさとの畦道に変らず咲きているか彼岸花
大好きな秋がだんだん短くてわたしは老いてゆくばかりなり
久々に聞く友の声　よみがえる受話器の向こうにかの支部歌会
師に従きて歌友らと旅せし昏き日よ師は逝き友逝きわれも老いたり
夏服のTシャツ冬のダウンにも用なく守られ季節を失う
飾ること隠すことなく語り合う友を得たりぬ終のご褒美

・逆縁の辛苦に耐えて施設に暮らす作者の生き甲斐は短歌、友は財産。

恐竜の孵化　　東京　西野美智代

鳥になり雲にも乗れし日は遥か百六十センチの身を持て余す
スリッパでごきぶり叩く安易さにミサイル発射命じられぬん
感じると分かるの間に真実があると聞かされ亡き夫浮かぶ
恐竜の孵化かと画面にときめけばスローモーションのぜんまい発芽
呉れにしは高額のもの贈りしは見えざるものにありて五分五分
地味にして気品ただよふ承和色の菊を選びて恩師に供ふ

・一首目上句の暗喩が、今のままならぬ身一つを持て余す切実さを訴える。

富士に向く窓　　川崎　松田恭子

再びの入院となり八階の窓に立ちたり富士に向く窓
山々の名前書きある札あれど歴然として富士は富士なり
点滴を引つぱる人も車椅子押さるるも並び雪富士に向く
入院の部屋の窓より射してくる朝日のまぶし今日は晴天
母吾をいさむる如き物言ひを終へて切れたり娘の見舞ひ
夫にいつも送られて来し中央道免許返納の今はすべなし

・入院生活では富士が慰めであった。わたしも娘を扱いかねている。

さびしき香気　　倉敷　宮原迪恵

鳥には鳥の風には風のことばあり亡夫の言葉は今もきこえて
踏み入れる故郷の神社の境内に菊花展ありさびしき香気
秋くれば思うふるさと　味噌の香の祖母の作りしけんちん汁よ
ひっそりと住むといえども楽しもよ実家よりもて来し山茶花が咲く
人生を考える時は過ぎたりと嫗は思いぬ野菊摘みつつ
抑えても抑えても湧く不安あり真夜に亡夫と飲むコップ酒
ある時はピアノと車の支払にすっからかんのわが家でありき

・五首目では諦念と達観の今の境遇を反芻しつつ、自己を解放している。

作品二、三特選

（一月号作品から）　　渡辺礼比子　選

〈作品二〉

思い出の店　　さいたま　丑山眞弓

広島の平和宣言聞かせたい日本語わからぬプーチンなれどロシアより愛をこめては映画にて弾をこめての殺戮ばかり騒がしい地球の姿を何とする術なく輝く夜空の月は番犬かとよくよく見れば陶の犬くさりにつながれ我を睨みぬ

・シニカルな目の働きのある時事詠。二首目のリフレインが効いている。

鉄道開業百五十周年　　鎌倉　小笹岐美子

私からいつもあなたを連れ去ったあさかぜ二号東京行きは上京する人を何度も見送ったブルートレインは寂しき群青父見舞う夜行列車の旅三度四度目はついに間に合わざりき「戦争を知らない子どもたち」を歌えるだろうか孫の世代も

・一、二首目は過去回想を小粋に仕立てた。四首目の反戦歌に共感。

青鷺　　横浜　庄司健造

少しずつ水鳥もどる鶴見川の土手に咲きたりキバナコスモス久々の歌会の部屋の前に立ち深呼吸してノブを回せり微動だにせず白浪を見つめおり托鉢僧のごとき青鷺のんびりとベンチに空を見上げてる空のむこうは何色だろうどうしても言えない事があるんだよ無花果の葉はすなおに育つ

・四首目の発想の新鮮さ、五首目の転換の意外性に注目した。

寺子屋　　宇治　中井房江

創立百五十年とう小学校　明治五年はまだ寺子屋か直葬に逝きし人あり国葬に送らるるあり秋の過ぎゆく人の死のこの差はヘンだ　大きなる葬儀の後の更なる国葬ものぐさを我に許せり朝よりの目眩むかつき臥すしかなくて今日はもう疲れ果てたよ吾子なれど帰って来なくていいと言いたり

・時事詠も家族詠もマイペースで伸びやかに歌うのが作者流。

みごとな仕事　　愛媛　平川良枝

七時過ぎガレージ開ける音のして向かいの若者定刻出勤食い荒らし翌朝さらに掘り深め猪と言えどもみごとな仕事台風禍に醜く咲きし藤袴アサギマダラは今年も飛ばず台風は潮風連れて吹きまくり木木の葉ずらっと冬模様なり穏やかに黄昏迫る日の続き庭の柿の実さらに色づく

・冷めた目の働きにより、しっかり見るべきところを見ている。

仲間がいない　　常陸太田　藤本佐知子

お隣に若き夫婦が越してきて老人われら少し浮き立ついつしかに降り出したらし面上げて庭見渡せば石が濡れおり

長雨が止めば畑のきゅうりはも拗ねて曲っていまのわたくし
落葉掃く手元にひとつまたひとつはらりと小さな秋が降り来る

・力の抜き方が上手い。それだけに歌が軽く流れないよう心掛けたい。

インドカレー　　さいたま　松沢　みどり

銀行へ行くふりをして外に出るお昼は一人でぼーっとしたい
久しぶりにインド料理の店へ行くとびきり辛いカレーを食べよう
せんべいのようなつまみをかじりつつ一気飲みするアサヒドライゼロ
昼休みにノンアルビールを飲んだっていいじゃない酔ったふりなんかして
焼きたてのナンをちぎって頬張ってカレーをつけてまた頬張って
食べきれぬナンを包んでもらいたり今夜のビールのつまみにしよう

・仕事の隙間を縫って独りの時を楽しむ。痛快な自己劇化の歌。

無骨な果実　　行田　安田　恵子

荒れ畑に花梨一樹がもえてたつあまた無骨な果実かかえて
そよりとも動かぬ枇杷の葉の茂り隣家の窓に映りて寡黙
夏の陽もかげれるひとり先妻の墓石洗えばひぐらしが泣く
この秋も痩せたサンマに塩をふる壊れかけたる季節の日暮
足裏は季節にさとし八月の畳に素足が秋を感じて

・粗削りだが、どの歌においても個性的なフレーズが精彩を放つ。

〈作品三〉

力　　瘤　　鎌倉　河野　慎二

きしきしと材は鳴りつつ力瘤入れて抜きたり錆たる釘を
珍しきマユハケオモトの赤花を咲かせし者はただのわたくし
相愛し語らふことが草花の仕事です　また春に会ひませう
振り返る猫を撮りたり路地裏に金木犀の香は匂ひつつ

・短歌的なるものに縛られることなく、さらに放埒に詠んでほしい。

木琴の音　　島根　澤田　久美子

病院へ忘れし傘をとりに行く木犀かをる小路を抜けて
誰もゐぬ小路を歩む秋日和　木琴の音がきこえさうなる
傘ひとつといへど手元に戻りたる縁（えにし）の深さ思ふ長月
山里の日暮は早い　ほろほろろ家路に就けと山鳩が鳴く

・平易平明な言葉を用いて詩情に富んだ世界を構築している。

月下美人　　東京　田村　久美

月にのみ心開きて咲きゐるか月下美人の白く光れり
賑はへる神社の祭りを見下ろしてタブノキは立つ秋空の下
石段の上の山門は凛然と立ちて阻めり現世の縁を
真向かへる如来座像の静かにて強きまなこをひたと受けとむ

・姿のよい調べの整った歌。負の感情に焦点を当てた歌も見せて欲しい。

コロナ　　横浜　藤田　祐恵

コロナに罹り休んでおった一週間手元にいつもスマホがあった
気怠くて底の底まで落ちるように歪んだ時間をベッドに沈む
無症状の人も数多いるという無表情という仮面かぶりて
自宅というカゴの中に閉じ籠もる小鳥のように鳴いてみようか
一時間ほど薬が効いて寝たようだ雨の音だけ聞こえくる午後

・コロナ感染した非日常の時間を歌人の目で切り取ってみせた。

村野次郎への旅（155）

大正期の「香蘭」（十六）

千々和　久幸

急ぐ旅というほどではないが、後々の旅程を考え先を読んでいくことにする。「香蘭」第四巻第八號は、大正十五年（1926）八月一日に発行された。表紙畫及び題字、裏畫北原白秋。編輯兼發行人田中次郎、發行所香蘭詩社。八月號の頁数は七月號と同じく、五十八頁。

七月號までには表記はなかったが、今月から面會日として巻末に「北原先生ー毎月第一木曜夜、発行所ー毎月第一日曜」と明記されている。

さて目次を見ておけば、巻頭の「短歌」欄は村野次郎、酒井廣治、深野庫之介、島田旭彦、橋本敏夫、清原齊、本間樂寛、冬野木枯、南部松若丸、川村浩、南草萌、池上秋石、橋本政一、石野正太郎、穂積忠、杉浦翠子の十六名である。

次いで、杉浦翠子のエッセイ「女性の叫び」（下）が三頁。二番目の短歌欄には、芥子澤新之介など十一名。さらに南部松若丸のエッセイ「前田氏と故島木氏との論争に就て」が四頁、葉月集（短歌）に十二名、香蘭合評會、本間樂寛のエッセイ「一茶と啄木」四頁半、樹陰集（短歌）に森山茂など十六名、そして前月歌壇合評、白日集（短歌）三十四名、となっている。白日集にはわたしの記憶にある歌人はいない。

さて例によって巻頭の村野次郎「犬蓼」六首を読んでいこう。

①わがことを考へ居れば眼の先の蚋（ぶよ）の飛ぶさへわづらはしけれ
②犬蓼のはつかに紅き旱地（ひでり）や今年の夏はわれ痩せにけり
③云ふほどのことにあらねどこの幾日何かはかなくわが過し居り
④こゝろ疲れて居るにしあらんとりとめもなき事思ひでて眠られなくに
⑤ねぐるしく起きいでにけり明けきらぬ土間にはいまだ蚊のうなる声
⑥なまけ居てよしなし物を食ひたればいさゝか腹をそこねたるらし

今月の一連、先生にもこんな鬱鬱として楽しまぬ壮年の日があったのだ。このような場合、先生は殆ど具体を提示されることはない。あくまでもアトモスフィア（雰囲気）である。

先生の身辺について残されている僅かな手掛かりは、『村野次郎歌集』巻末の略年譜（文責星野丑三）のみである。

そこにはこうある。「大正13年（1924）、白秋、夕暮、千樫、善麿らが創刊した『日光』に同人として参加、6月妻輝子没す」と。

だが作品は、その二年後のものであり、評伝の資料にするには間遠いが、底流で気持は繋がっていることは間違いあるまい。

①の歌、作者の苛立たしい気持を蚋に託（かこつ）けて追いはらおうとする心理が、殆ど手に取るように解る。「さえ」どころではない、もはやその蚋一匹に思考が掻き乱されているのだ。思考が一点に集中出来ないのは、蚋のせいだと思いたいのである。

堂堂巡りして思考が一点に集中出来ない自

分に苛立ち、それは蚋のせいだと無理に思おうとしている。思考の深まりを期し得ない時の、これが常人の常であろう。

②の歌、①の歌との因果関係でつい読みたくなるが、表面からそれを直接的に窺い知る詩句はない。それは①の歌の裏面の心理を、別の角度からパラフレーズしたものだからである。下句の具体が先生の心理を語って余りある。

③の歌、内容的には②の歌と裏腹の関係にある。一首の主意は下句にあって、上句はその序詞的な構成になっている。一、二句の断りは発語の前のウオームアップ、で、殆ど気息だけの下句が一首に膨らみを与えている。

先生には珍しく己の心情を手探りしている様子が窺える。

④の歌、作者の思考は集中し拡散し中断し、最終的に己の不如意を宥めにかかる。

⑤の歌、それでも作者はまだ寝付かれない。その理由が「蚊のうなる音」である。「蚋」から「蚊」へ思わぬ伏兵と戦いながら、その戦う自分を自覚することで辛うじて納得しようとする。自己の行為の一々に納得出来る意味づけと理由が要るから、人間とは何とも厄介な生きものだ。

⑥の歌、その結果、「腹をそこねる」という余録ならぬ、副産物もあったのだ。「よしなし物」は辞書的には「理由のない物」の意だが、作品に添って読めば食うこともない「無駄な物」「つまらぬ物」くらいのところか。苦々しい気持を食い物に託けて、微苦笑を誘う。

今月の一連は、捉えどころのない心理を詠んで、先生の人間臭い一面を見た思いで強く印象に残った。

尚、今月は「日光」七月號より村野次郎、杉浦翠子の作品が転載されているので、再録しておく。

妻の忌日に歌へる　村野　次郎

二年は早や過ぎにけりこの道のさびしらにしてたゞ乾きたる
つつしみて水をたむけぬ墓石にうつる水照もゆれてさびしく
をさなごの手をさしのべてそゝぐ水のこぼれて墓の土にしみたり
夏に向ふ日和つづきて垣ちかき墓石の水にほこりたまれり
妻の忌に人らつどへりをさなごの年端ゆかねばよろこべるらし

また前月歌壇抄として、次のような作品が転載されているので、引いておこう。

われいまだ耕りなれず僕らに比べてしるく泥をかむれり　吉植　庄亮
道なかに瀬をなし流れ行く水のささ波清き砂の上かも　釋　迢空
けさの朝は五月一日河鹿鳴くすがしきこゑに目ざめけるかも　古泉　千樫
一人ゐて何を思ひし夕影にそよめく花は竹煮草かも　松村　英一
卯の花を手に折りもてるわらはべは田堰の水をとびこえ行ける　太田　水穂
ついでありてわれ郊外に來てみれば麥の畑はいろづきにけり　斎藤　茂吉
こんにやく玉はくさりたらむと云ひながら椎の落葉を妻は掃き居り　土屋　文明
窓のべのわか葉の雨の明るくて書きし手紙はよく書けにけり　橋田　東聲
つばくらめ翅ひたゆたひて出で行けり若葉の曇り肌さむくゐつ　宇都野　研

往時の「香蘭」は白秋の存在が大きく、歌壇への目配りにも怠りはなかった。会員にもそれだけの覚悟と矜持があった筈である。